2013.12　vol.27

Viva地球
地球の上で共に生きる
企画・制作 中日新聞広告局

# 生き物いっぱいの田んぼ取り戻そう “ふゆみずたんぼ”は湿地の役割も

NPO法人ラムサール・ネットワーク日本水田部会長／田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト　呉地正行

この百年で全国の湿地は六割以上、宮城県では九割以上も減ってしまいました。かつて田んぼは、ハクチョウやガンなど水鳥の生息地として湿地の役割も果たしていました。しかし、水はけをよくするほ場整備による乾田化が進み、冬の田んぼはからからに乾いて、水辺の生き物がすめなくなってしまっていたのです。

## 渡り鳥だけでなく農業にもメリット

宮城県では、蕪栗沼と伊豆沼に渡り鳥が集中し、周辺の農作物への被害や鳥の伝染病や感染症が一気に広がるリスクが問題になりました。生息地分散のために、収穫後の冬も田んぼに水を張る〝ふゆみずたんぼ〟の試みを始めました。これは、鳥たちだけでなく、農業面でも大きなメリットがありました。

雑草が生えにくくなり、生き物が増え、土壌も豊かになりました。害虫を食べるカエルやクモだけでなく、害虫がいない時期にそれらのえさになる〝ただの虫〟も増えました。害虫も含めていろんな生き物がいる状態で経済的に成り立つように水田の生物多様性を総合的に管理していこうというのが、最近の潮流なんです。

## 初めて日本の水田がラムサールに登録

そのようにして「蕪栗沼・周辺水田」は、二〇〇五年に水田を広く含む湿地として初めてラムサール条約湿地に登録されました。ふゆみずたんぼで、農薬を使わなくてすむようになったことで、ドジョウ、フナ、ナマズ、タニシなども獲れるようになりました。これらは人間が食べることができる生き物です。つまり、田んぼでごはんもおかずも獲れるんです。今後はこのような〝水辺の幸〟が私たちの生活を救うことがあるかも知れません。

ふゆみずたんぼをはじめ田んぼの生物多様性を取り戻す様々な取り組みを共有し、広げることを目指して、田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト（通称・田んぼ10年プロジェクト）が今年スタートしました。

## 18項目の目標を設定 達成に向けて情報交換

田んぼ10年プロジェクトは農家、自治体、環境団体、研究者、企業、消費者団体など様々な分野からのメンバーで構成されています。興味があればどなたでも入っていただくことができ、生物多様性の向上をめざす田んぼの管理でそれぞれが実践していることの情報交換をしたり、取り組みたい調査やアイデアを協力して実践できる場として活発に活動しています。二〇一〇年に開かれたCBD・COP10では、生物多様性を回復するための二十項目の愛知目標が採択されましたが、田んぼ10年プロジェクトでは、愛知目標に基づいて十八項目の水田目標を設定し、これを達成するための具体的な行動計画を作り、分かりやすい冊子も作りました。

この夏には、宮城県の登米市で第一回目の交流会を開催し、二回目は、大分県で開催する予定です。中部地方の農業者や自治体にもぜひプロジェクトに参加してほしいです。

このプロジェクトで日本の田んぼが農家にとっても生き物にとっても恵みの場となるように取り組んで行きたいと思います。

田んぼ10年プロジェクトキックオフ集合写真

呉地 正行（くれち まさゆき）

1949年神奈川県生まれ。東北大学理学部卒。日本雁を保護する会・会長、ラムネット共同代表などを努める。ガン類とその生息地の保護保全に取り組み、市民参画型の自然再生運動や地域興しを実践し、循環型農業や生物多様性水田として注目される「ふゆみずたんぼ」を広く紹介。日本鳥学会鳥学研究賞（1981）、日本鳥類保護連盟総裁賞（1994）、「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰（2001）、生物多様性日本アワードグランプリ(2011)受賞。主な著書に「雁よ渡れ」（どうぶつ社）、「いのちにぎわうふゆみずたんぼ」（童心社）など。

## みんなのESD ～今月のESDニュース～

### ESDってなんだろう?

今、私たちは地球環境や貧困、人権、平和、食料など多くの社会問題を抱えています。これらの問題を乗り越え、人や生き物がこの先もずっと安心して暮らすために、学び、行動できる人を育てていくことがESD（Education for Sustainable Development）です。国連では2005年から10年間、ESDの取り組みを行っています。そして、10年目の2014年11月、あいち・なごやに世界各国から閣僚や政府関係者が集まり「ESDに関するユネスコ世界会議」が開かれます。

ESDってちょっと難しそうですが、実はとっても楽しくて、わくわくすることが沢山！みなさんにそれを知ってほしくて「ESDイヤーキックオフイベント」を1月に開催します。まずは、ESDって何か、どんなことが自分にできるのか、一緒に考えてみませんか?

### ESDイヤーキックオフイベント

**さかなクンと高柳明音さん（SKE48）によるトークショーや、パネルディスカッション。ワークショップの体験など盛りだくさん!**

**日時：2014年1月13日（月・祝）13:00～　場所：ウインクあいち**
**主催：ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会　共催：中日新聞社**

ご参加希望の方は、FAX、はがき、ウェブ（中日新聞ホームページ）のいずれかでご応募ください。

【ハガキ・FAXでのお申込み】
郵便番号、住所、代表者氏名、電話番号、参加人数をご記入の上、ご応募ください。
■ ハガキ 〒460−8511（住所不要）中日新聞社広告局広告開発部「ESDイベント」係
■ FAX　052−201−9752

【中日新聞ホームページでのお申込み】
http://www.chunichi.co.jp/k/esd20140113 よりご応募ください。

※応募者多数の場合は抽選　※当選は入場ハガキの発送をもってかえさせていただきます。
※個人情報は、ご本人の同意なく第三者に対し、情報の交換、売買、共有を行うことはございません。

応募締切 12月20日（金）

## 目撃者たちの 未来への伝言

### 大雪減った地獄谷温泉

写真：Eyewitness 小原玲（写真家）

吹雪の中、赤ちゃんを抱きしめるニホンザルの母親。志賀高原の地獄谷温泉はニホンザルが温泉に入る姿で世界的に有名な場所だ。特にこの数年は海外からの観光客が増えて、いつ行っても賑わっている。10年ぐらい前までは大雪で、スノーシューを履いて、腰よりも上の雪かきをしながら撮影に向かったりしたこともあったのだが、最近はそれほどの大雪はめったに見られなくなった。これも地球の気候変動の現れだと思う。

## まちレポ

※「まちレポ」の連載は今回で終了します。

### A Way of Lifeがまちづくりの原点

広島経済大学 経済学部教授、サスティナブルコミュニティ研究所 所長／川村 健一

世界の様々なまちを訪ね歩いて 30 年余。どの町でも、その地で、足るを知り、安心して安全に生き続けられることを豊かさの原点とした様々な暮らしが繰り広げられていました。何が、大事かと言われれば、その地での自然、歴史、文化、人々の暮らし方として創り上げられた“A Way of Life（暮らしの在り様）”に帰結するのではないでしょうか。人々のつながりや風土との長い関係の下で、長年かけて作り上げられた、その生き方が、その地に住む人々の知恵として DNA に書き込まれてきたのです。

訪れたまちで子供の笑顔に接する度に、その地で生き続けられることへの先祖への感謝と次の世代への責任を感じます。これからも様々な地を訪れて、その地での A way of Life を識ることが、まちづくりの原点として私のライフワークとなるでしょう。